オリンピック・パラリンピック教育としての音楽鑑賞
―世界地図を用いた音楽鑑賞指導の研究―

Music appreciation for Olympic-Paralympic Education
—A study on Music Appreciation using the World map—

平井　李枝 †
HIRAI Rie

概要（Summary）

本論文は、2020年オリンピック・パラリンピック開催国である日本が推進する学校教育におけるオリンピック・パラリンピック教育を、音楽鑑賞を通して行う際の効果的な指導法について検証したものである。国際理解を目的とする場合、音楽鑑賞において世界地図を用いる指導法が最適であると考え、実践を通して検証しその効果を論じた。筆者が自ら開催する演奏会「文化庁「文化芸術による子供の育成事業」芸術家の派遣事業「Dr.りえのおしゃれなクラシック」を通して実践的に研究を行った。そして子供たちの感想文を分析することで、音楽鑑賞に世界地図を用いることによって得られる効果を明らかにした。

This thesis is a research on teaching method of music appreciation for promotion of the Olympic-Paralympic education in school.

Japan is the host country of the Olympic-Paralympic Games 2020.

I have been giving many concerts in the title of “Japan.Dr.Rie,The Graceful Muse.”on the project of Agency for Cultural Affairs,Japan that is intended to enhance international mutual understanding in school.

The practical research through my concerts and analysis of children’s impression essays revealed positive effects by using the map of the world for music appreciation.

キーワード：オリンピック・パラリンピック教育, 音楽鑑賞，世界地図，国際理解，Music Appreciation, Olympic－Paralympic Education

１．はじめに

本論文は、2020年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピックに向けて、音楽を通して国際理解を深め、自国の文化や良さを再認識できるようにするための音楽鑑賞方法を実践を通して検証し、音楽鑑賞指導に世界地図を用いたときの効果について論じるものである。

筆者は2012年に「世界で活躍し『日本』を発信する日本人」に選出され、世界の国々に日本の素晴らしさを伝える音楽活動を行ってきたが、訪日外国人の増加にともない、日本の子供達にこそ、日本及び世界の素晴らしさを体感してもらいたいと考え、文化庁「文化芸術による子供の育成事業」の「芸術家派遣事業」協力芸術家として、全国の学校で「Dr.りえのおしゃれなクラシック」という演奏会を開催している。これまでも国際理解を目的とした演奏会を実施していたが、2015(平成27）年度からは、オリンピック・パラリンピック教育としての特別プログラムを行っている。

オリンピック憲章のオリンピズムの根本原則には

1．オリンピズムは肉体と意志と精神のすべての資質を高め、バランスよく結合させる生き方の哲学である。オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するものである。その生き方は努力する喜び、良い模範であることの教育的価値、社会的な責任、さらに普遍的で根本的な倫理規範の尊重を基盤とする。

と明記されている。また第4章　国内オリンピック委員会の役割に

27　2.1 自国において、特にスポーツと教育の分野で、オリンピズムの根本原則とその価値を奨励する。この目的のために、あらゆるレベルの学校、スポーツ・体育の教育機関および大学においてオリンピック教育プログラムを推進する。さらに、国内オリンピック・アカデミー、オリンピック博物館など、オリンピック教育を専門に担う機関の設立を奨励し、文化的なものを含め、オリンピック・ムーブメントと関連するその他のプログラムを奨励する。

と明記されている。

2015年7月に東京芸術大学奏楽堂にて開催されたオリンピック・パラリンピック連携大学地域巡回フォーラム「首都圏ブロック大会（第2回）in東京」においても、2020年開催国として、スポーツだけでなく文化面からも教育分野での推進を行うという方針が打ち出されている。

筆者は2015年に、東京都教育委員会「オリンピック・パラリンピック教育推進校」に指定された東京都北区立堀船小学校校長（当時）の宇田川雅弘先生との協議により、音楽鑑賞においてもオリンピック・パラリンピック教育を推進することを決定した。そして、2020年の開催国として「世界を知る・日本を知る」ために、これまでのオリンピック・パラリンピックの開催国のクラシック音楽を鑑賞し、他国の文化を理解することを目的とした演奏会を開催することにした。堀船小学校での取り組みは「オリンピック・パラリンピック教育推進」の成果が認められたとして、東京都の平成27年度『体力向上推進優秀校』に決定し、表彰を受けた。

このような結果から、筆者はオリンピック・パラリンピック教育に関連した音楽鑑賞教育こそ、他教科との連携の可能性が最も高いと考え、その後の文化庁事業「Dr.りえのおしゃれなクラシック」においてもオリンピック・パラリンピック推進教育のためのプログラムを実施し、国際理解にふさわしい音楽鑑賞法の開発を行っている。

本論文では、国際理解を目的とする音楽鑑賞教育に世界地図を用いることの効果について、演奏会による実践研究及び子供達の感想文からの分析検証により明らかにする。

写真１　東京都北区立堀船小学校での実施風景
低学年及び幼稚園児対象2015年６月25日

写真２　東京都北区立堀船小学校での実施風景
高学年対象2015年７月９日

2.　国際理解を目的とした音楽鑑賞教育に必要な教具 ―世界地図―

2.1　音楽鑑賞と世界地図

筆者は「Dr.りえのおしゃれなクラシック」では、演奏の前に、作曲者や楽曲についての解説を行っている。特に作曲者の出身地などは楽曲をよりよく鑑賞するために必要不可欠である。楽曲を鑑賞する前にそれらの情報を伝えることで、子供たちがより興味をもって鑑賞できるからである。

筆者は様々な演奏会の実施による実践研究の結果、国際理解を目的にした音楽鑑賞には、世界地図を用いることが最適であると考え、その効果について実践を通し検証した。

学校現場では、地図に関する授業は社会科が主であり、音楽鑑賞の授業に地図を活用している例はあまり見られない。そこで2016年に栃木県の音楽担当教諭60人に調査を行った。音楽鑑賞の授業で視覚的教材として地図を用いたことがあるかどうかを訊ねたところ、「音楽授業で世界地図を用いたことがある」と答えた教諭は全くおらず、0パーセントであった。作曲者の出身地などは教科書などに明記されており、授業の際はそれを読み上げるのみで、場所の確認まではしていないとのことであった。このような場合、例えばドイツの作曲家、ベートーヴェンの楽曲を鑑賞させたとして、「この作曲家はドイツの人ですよ」と教えたところで、場所の確認をしなければ「ドイツ」という国の単語を覚えるのみであり、実際の地理関係とは全く記憶が結びつかない。また「興味があったら後で調べておいてね」などと提案してみても、実際に授業後に子供たちが率先して地図を見て「さっきの国はここにあるのか」など自主的な学習につながる例は数少ないという現状がある。

そこで、筆者は「Dr.りえのおしゃれなクラシック」でのオリンピック・パラリンピック教育特別プログラムの実施において、世界地図を舞台上に掲示しながら音楽鑑賞のための演奏会を行うことにした。国際理解を目的とするならば、世界地図を見ながら演奏を聴くべきだと考えたからである。

2.2　世界地図の図法の選択

地図の図法には様々な種類が存在する。それらの中から筆者は「メルカトル図法」「モルワイデ図法」、そして子供たちの身近にある「地球儀」の3種類の方法を用い、音楽鑑賞教育に最適な地図の検証を行った。

メルカトル図法は、地図上に描かれた地球上の表面の全ての角度が正しくあらわされているという利点がある。しかし、地図の上下部分の面積に誤差が生じてしまうという難点もある。筆者の実践による検証の結果、子供は「大きい」「小さい」という面積の比較を感覚的に瞬時に行うため、この地図の上下の面積に歪みが発生するメルカトル図法は、北極と南極が大きくなりすぎてしまうため、子供の音楽鑑賞に用いる視覚的教材としてはふさわしくないことが分かった。

モルワイデ図法は地球を楕円形に描いたもので、北極及び南極の歪みを少なくし、実際の面積の日が等しくなる正積図法である。この図法は楕円形に描かれているため、「地球の形になっている」など子供たちにとって地球が球体であるという事を認識させるうえ、球体では不可能な地球上のすべての国々を平面で見られるという利点があった。

地球儀は地球の丸い形そのものを表している。しかし、音楽鑑賞の視覚的教材として用いたときは、地球儀自体のサイズがそれほど大きくないため、細かい国々まで良く見えないこと、球体のため、地球上の国々を一度に見ることができないという難点が明らかになった。

以上のことから、筆者は国際理解を目的とするオリンピック・パラリンピック教育のための音楽

鑑賞において、モルワイデ図法の採用がふさわしいとの結論を得た。

2.3　地図の中心

地図を描画する際は、自国を中心としたものが多い。日本の学校には日本中心の地図が主流を占めている。しかし、本研究において筆者はヨーロッパを中心とした地図を音楽鑑賞に用いることにした。その理由として以下の点を挙げる。

・日本中心の地図はいつも見慣れているため、新しい刺激としての教具が必要である。
・クラシック音楽はヨーロッパが中心となって発展したものであるため。
・ヨーロッパとアメリカは大西洋を横断することで、往来ができるという事を実感させるため。
・ヨーロッパとラテンアメリカ各国の音楽に関連性があることを理解させるため。

以上のことから筆者は音楽鑑賞に用いる教具としての世界地図を、モルワイデ図法によるヨーロッパ中心のものを採用することを決定した。

3. 地図を用いることによる効果

モルワイデ図法によるヨーロッパ中心の世界地図を見た子供たちに筆者は、次のように訊ねてみることにしている。

「みんなの知っている世界地図と同じかな？それとも違うかな？」

この質問に対する代表的な回答は以下のようになる。

・いつも見ている地図と違うよ。
・地図が地球の形みたいに丸くなっているよ。地球儀みたいだね。
・日本はどこにあるかわからないよ。日本はどこにあるのかな？

「では、日本はどこにあるのかな？探してみよう」

と筆者が問いかけると、以下のような回答が得られる。

・日本が真ん中にないよ。
・日本は右のはしにあるね。
・日本の周りは海だね。
・日本をもっと大きく書いてほしいなぁ。

日本の場所を世界地図上で探す際、普段見慣れた地図との違いを感じ取り、また日本の面積などにも興味を持つことが明らかになった。このような効果は小学校低学年から中学生に至るまですべての子供達に見られた。

このようなやり取りの後、実際に世界地図を用いて解説を行いながら、ピアノ曲や声楽曲の演奏を行った結果、以下のような感想が見られた。[1]

[1] 子供たちの感想は、原文のまま表記している。

・世界地図で場所を確かめながら音楽をきけたので、どこの国の音楽かよくわかった。
・国の位置とか知らなかったことをおしえてくれてありがとうございます。知らないことについて知ってみることが面白いのだという事がわかりました。（小５男子）
・ベートーヴェンはドイツの人ということを、はじめて知りました。（小２男子）
・スペインのグラナドスさんはとってもいい曲でした。（小３女子）
・今日の演奏の中で、一番スペインのグラナドスが心に残りました。とても優しいような感じがしてよかったです。（小５男子）
・バレエでよく知っている「くるみわり人形」はロシアの曲っていうことがわかって良かった。（小２女子）
・ぼくがすてきだなと思った曲はフランスのドビュッシーです。（小１男子）
・ブラジルの「オデオン」は踊りたくなるような曲でとっても好きです。（小４女子）

・ぼくたちが歌っている「オニノパンツ」はイタリアの歌だったなんではじめてしりました。（小３男子）
・曲を作った人の国の場所をしめすために、地図を持ってきてくれているのもすごいと思いました。（小６男子）

・音楽をききながら世界の位置も知れたのでよかったです。（小５女子）
・曲を演奏する前に一つ一つ、その曲がつくられた場所や作者について、その曲の名前の由来までもていねいにわざわざ世界地図をもってきて教えてくれたので、すごく分かりやすかったです。（中１男子）

作曲者や曲名と国名が併記された感想が多く見られた。これは、これまで地図を用いなかった演奏会では、あまり見られなかったことである。世界地図を掲示し、場所の確認をしながら鑑賞することにより、国名を記した感想文が増加したことは、世界地図の活用によって子供達の記憶に各国と作曲家たちが関連付けられたことを示している。

写真3　世界地図の活用
川崎市立金程小学校　高学年対象（2016年6月16日）

写真4　村上市立神納中学校での実施風景
（2016年９月13日）

4　これまでの開催国の音楽

筆者はオリンピック・パラリンピック教育推進として、音楽鑑賞で国際理解を深めるために、こ

れまでの開催国の音楽を取り上げ、世界地図などを用いて解説を行いながら演奏を行った。本項では、その一例を記述し、世界地図を用いることによる効果を子供たちからの感想文の分析により明らかにする。筆者の演奏はピアノ独奏及びソプラノ独唱であるため、楽曲選択はピアノ曲、及び声楽曲となっている。

4.1　フランスの音楽

フランスでは1900年に第2回大会、1924年第8回大会がパリで行われている。また 冬季では第1回大会が 1924年にシャモニー・モンブラン、1968年に第10回大会がグルノールで、第16回大会が 1992年にアルベールビルで行われている。

フランスには有名な作曲家が多数存在するが、中でも子供達の印象に深く残っている作曲家としてクロード・ドビュッシー（Debussy, Claude 1862 - 1918）が挙げられる。筆者は《ベルガマスク組曲》より〈月の光〉、《映像》より〈金色のさかな〉、《喜びの島》などを選曲し、世界地図を用いて解説しながら演奏を行った。〈金色のさかな〉は日本の漆塗りの作品からの印象で作曲されているため、日本と関連がある。また《喜びの島》はアントワーヌ・ヴァトーの「シテール島への巡礼」からの印象で作曲されている。これらの楽曲の鑑賞では、創作の源となった絵画や作品を演奏の前に掲示して見せた。

以下に子供たちの感想の抜粋を掲載する。

- 一番きにいったのは。フランスの『ドビュッシー』（月の光）がきれいなピアノですばらしかったです。（小５女子）
- 私は「月の光」の月をイメージした感じは月が雲にかかっている感じから雲がだんだんどいていくというイメージですてきでした。（小５女子）
- フランスのドビュッシーの金色の魚がすてきだなーと思いました。ばめんをひょうげんしていてお話の中に入りこめたみたいでした。（小３女子）
- 私が一番心に残ったのは「ドビュッシー」の〈喜びの島〉です。島から島へ行くまでの間の出来事を音で表現されていました。小さい波から大きい波への変化もわかりやすかったです。最後は目的の島をみつけた場面は明るく弾んだ感じで聴いていてとても楽しかったです。（中１女子）

これらの感想の中で、ドビュッシーの《月の光》については、楽曲からどのような形の月を思い浮かべるか、子供たちがそれぞれ考えていた。そして、「月の満ち欠け」への興味、さらに世界のどこで見ても月は同じ形なのか、見える星座は同じなのか、という新たな興味へのきっかけを作ることができた。

4.2　イギリスの音楽

イギリスでは1908年に第4回大会、1948年に第14回大会、2012年に第30回大会がロンドンで開催されている。イギリスで子供達に印象深く残る作曲家としては、エドワード・エルガーElgar ,Edward(1857 - 1934)が挙げられる。エルガーの〈威風堂々〉や《愛のあいさつ》などは子供たちにとって、どこかで聞いたことのあるメロディーとして親しみやすいものであった。世界地図を見ることによって、イギリスが日本と同様に海に囲まれた国家であることを発見し喜んでいる姿が見られた。

4.3　スペインの音楽

スペインでは1992年に第25回大会がバルセロナで開催されている。スペイン音楽は筆者の専門分野であるため、エンリケ・グラナドス（Granados,Enrique1867－1916）、マヌエル・デ・ファリャ（Falla, Manuel de1876－1946）等、様々な楽曲により音楽鑑賞を行った。

グラナドスはバルセロナを拠点に活躍した作曲家である。20代にはパリで活躍し、ドビュッシーやラヴェルらと親交を深めた。このような作曲者の背景を説明する際、世界地図を用いることによって、より理解が深まることが明らかになった。

グラナドスの例では、「スペインとフランスって隣なんだね」「日本だったら東京と大阪くらいの距離かなぁ」など、地理的な事柄を地図を見ることによって感じ取り、また自分たちが理解できる範囲の事例に置き換えて考えることができていた。

筆者はファリャの音楽もプログラムに取り上げているが、ファリャは晩年にフランコ政権に追われ、アルゼンチンに亡命しているため、スペインとラテンアメリカとの関係を音楽でも感じることができる。実際に世界地図を使い、スペインとアルゼンチンを確かめてみると、子供たちからは「日本より近い」などの声が挙がった。このような子供たちの気付きは、日本中心の世界地図ではなかなか感じ取ることができない。さらに発展させて、ラテンアメリカの大部分はスペイン語を公用語としていることなどを話すことで、世界の言語事情にも興味を持たせることができた。

グラナドスでは《アンダルーサ》などの他にも、ゴヤの絵からの印象で作曲されたピアノ曲集《ゴイェスカス》から〈嘆き、またはマハと夜うぐいす〉なども取り上げた。創作のインスピレーションの基となったゴヤの絵画「着衣のマハ」を掲示し、世界地図を用いて解説を行った後に楽曲の鑑賞を行った。

またファリャの音楽からは、バレエ音楽から《恋は魔術師》より〈真夜中―火祭りの踊り〉などを取り上げた。

以下にスペインの音楽に対する子供たちの感想の一部を掲載する。

- スペインのグラナドス作曲マハと夜うぐいすの曲は美しい美女とうぐいすとの会話がとても伝わってきました。また、いろんなうぐいすの鳴き声が聞こえて私もすごくいい曲だと思いました。（小５女子）
- マハと夜うぐいすのとき、うぐいすがこういっているのかなぁ～ってそうぞうできました。（小５女子）
- 僕が一番心にのこった曲はスペインのグラナドスの「アンダルーサ」です。このきょくははじめて聴く曲ですけれども、すごく有名な曲で、ピアノの音のリズムがはやかったです。でもリズムがはやくても、ピアノの音がすごくきれいに聴こえて「ピアノはきれいな音がだせる楽器ですごく演奏するのが難しそうだなぁ。」と思いました。（中１男子）
- グラナドスが愛する奥さんのために曲を作ったりしていると知って、とても一途な方で本当に大好きなんだと感じました。（中２男子）
- ファリャの《真夜中―火祭りの踊り》は、りえ先生の言っていた通り、最初に鐘が鳴っていて面白い始まり方だと思いました。（中２男子）
- 僕は今日の演奏を聴いて、同じヨーロッパの人でも曲の感じ方は全然違うんだなと思いました。グラナドスは愛する人のために曲を作っていたけど、ファリャは大好きな音楽そのもののために曲を作っていて曲を作るきっかけみたいなものも人によってい違うんだなと思いました。（中２男子）

写真5　グラナドスの音楽に関する解説風景
川崎市立柿生小学校高学年対象（2016年6月17日）

写真6　世界地図で大陸を確認
東京都中野区立啓明小学校（2016年6月11日）

4.4　ドイツの音楽

ドイツでは1936年に第11回大会が ベルリンで、1972年に第20回大会が当時西ドイツのミュンヘンで開催されている。また冬季では第4回大会がガルミッシュ・パルテンキルヘンで開催されている。

ドイツの作曲家で子供達にとっても身近なのは、J.S.バッハやベートーヴェンである。大抵の学校の音楽室には肖像画が飾られており、人物像としては最もよく知られているはずである。筆者がベートーヴェン作曲《エリーゼのために》を演奏したところ、小学校低学年の子供たちからは「曲は聞いたことがあったけれどドイツの曲だったと初めて知った」という内容の感想が多く見られた。

日本では子供達が幼少期に親しむ歌唱曲に、ドイツの楽曲に日本語の歌詞を付けたものが多数存在する。《ちょうちょう》や《気のいいアヒル》など子供の歌唱教材などを通して世界への理解を深めることも可能である。

4.5　ロシアの音楽

ロシアでは旧ソ連時代に1980年第 22回大会がモスクワで行われている。また冬季では2014年に第22回大会がソチで行われている。

ロシアの作曲家としては、チャイコフスキーやラフマニノフが有名である。特にチャイコフスキーはバレエ音楽《くるみわり人形》などがCMなどで使用されたり、携帯電話の着信音に使用されたりすることから子供達の身近な楽曲であることが感想文の調査により明らかになっている（平井2015）。世界地図を見ながらロシアの場所を確認したところ、ロシアの国土面積に驚いている様子が多く見られた。これをきっかけとして、ロシアの作曲家がモスクワやサンクトペテルブルグで活躍していたことを話すと、子供たちからは「ロシアはこんなに大きいのに、どうして左の方ばかりに作曲家がいたのだろう」という疑問がわき起こった。そこで子供たちに理由を考えさせたところ、「左の端のほうが、ドイツとかフランスとかに近いからだ」という答えに辿り着いたのである。このような思考の発展は、世界地図を用いて音楽鑑賞を行うからこそ得られるものである。

演奏を通して、子供達は「へぇーあの曲ってロシアの音楽だったんだね。ロシアって広いんだね」と地理的位置と自分たちの記憶の中の音楽とが関連付けられて新たな知識となったことを喜ぶ姿が見られた。

・世界のクラシック音楽ではすごい音楽がいっぱいあって、すごいと思いました。その中で一番すごいと思ったのものがロシアのあし笛のおどりです。（小６男子）
・ロシアのチャイコフスキーがあし笛のおどりを作ったことがわかってうれしくなりました。バレエでおどっているのを見たので、ピアノをききながら私も足が動いていました。（小３女子）

4.6　イタリアの音楽

イタリアでは1960年に第17回大会がローマで、また冬季では1956年に第7回大会がコルチナ・ダンペッツオ、2006年に第20回大会がトリノで開催されている。

イタリアは子供たちにとっては食事としての知識が定着している例が多く見られた。「イタリアンは食べに行くよ」「ピザとかパスタは好きだよ」このような声が次々と挙がる。筆者が「みんなが知っているドレミファソラシドはイタリア語なんだよ」と話すと「へぇー、音楽ってイタリア語なんだ」などという感想が持たれる。イタリア歌曲やオペラ作品などイタリアの音楽は多種多様であるが、筆者が行った演奏会の中で最も子供たちの印象に残った楽曲を以下にあげる。

・デンツァ作曲《フニクリ・フニクラ》

筆者は日本の子供たちが幼少期から親しみ歌っている楽曲で、外国作品を基にしたものを取り上げることで、より外国を身近に感じることができるのではないかと考えた。デンツァ（1846–1922）作曲の《フニクリ・フニクラ》はクラシック音楽というよりは、イタリアのポピュラーソングである。イタリアで有名な楽曲であるという事を世界地図を用いて説明した後、楽曲自体については、「きっと知っている曲ですよ」という投げかけのみで、歌い始めた。曲がはじまり少しすると、隣の子供達と体をつつき合ったり、顔を見合わせながら、ニコニコとしている。その後に身体が動き始めるという現象が見られた。演奏が終わった後に子供達に「この曲、知っていた人！」と問いかけると、一斉に手が挙がった。そこで「《フニクリ・フニクラ》という題名で知っていた人？」と投げかけると、その手は一瞬で下げられてしまった。「では他の題名で知っている人？」と聞くと「オニのパンツ」という大きな声が挙がり、一斉に手が挙がったのである。事実、《フニクリ・フニクラ》は日本の子供達にとっては「オニのパンツ」という題の楽しい曲として親しまれている。筆者が「《フニクリ・フニクラ》は元々はイタリアの曲なんだよ」と話すと「へぇ～」という声が挙がった。ここで、子供達は「フニクリ・フニクラ」という言葉がイタリア語の「鬼のパンツ」を示すものだと思ってしまう。そのため、「《フニクリ・フニクラ》は登山電車の歌で、日本で替え歌になって流行ったんだよ」と説明すると、やっと納得する姿が見られた。そしてもう一度世界地図を見直してみると、イタリアが食文化だけでなく、音楽的にも日本に浸透していることから、より身近に感じられるという効果が見られた。

以下に《フニクリ・フニクラ》に関する子供たちからの感想の抜粋を記載する。

・ようちえんで　おにのぱんつをおどったのでうれしかったよ（小１女子）
・知っている曲がながれてびっくりしました。「フニクリフニクラ」がおにのパンツのもとになっているということが分かりました。（小５男子）
・最もぼくが感心したのは「フニクリフニクラ」です。「おにのパンツ」は、ほんとうはイタリアのデンツァからきた歌とは、知りませんでした。（小５男子）

さらに筆者はイタリアで名前が酷似している作曲家カッチーニ（Caccini, Giulio1545年頃 - 1618）とプッチーニ（Puccini, Giacomo1858 - 1924）を取り上げ、それぞれの作品を比較し、どのように印象に残るのかを検証した。

・私が特に印象に残ったのはプッチーニ（私のお父様）でした。りえ先生の歌声がとても美しくお父さんにお願いしているんだよと聞いたとき、どんなお願いをしているのかな？と思いました。ゆびわを買いに連れていって！連れて行かないと橋から飛び落ちるからね！という意味がこめられていたんだなあとは全然おもいつきませんでした。（中１女子）
・僕が印象に残っている音楽は、イタリアの「カッチーニ」さんと「プッチーニ」さんです。まず「カッチーニ」さんの《アベ・マリア》という曲です。ピアノの演奏中に「ア～ベ～マリア～」というところの平井李枝先生の歌声が体育館に響いていて、とてもきれいだったからです。「プッチーニ」さんの《私のお父様》という曲では「どんなお父さんなのか？」と考えたりしました。でも本当は橋の上のお店で「ゆびわ」を買いたくて、お父さんにお願いをして、だめなら「橋から落ちるよ」という少し怖い話でした。（中１男子）

4.7　ブラジルの音楽

2016年夏、第31回大会がリオデジャネイロで行われた。ブラジルの音楽としては、サンバやボサノバが有名である。筆者はクラシック音楽で、ブラジルを代表する作曲家、エルネスト・ナザレーNazareth, Ernesto（1863 - 1934）の楽曲を取り上げた。《オデオン（ブラジル風タンゴ）》はブラジル本国でも人気の高いピアノ曲である。

筆者がある学校で演奏したところ、偶然にも転入してきたばかりの男子児童が参加していた。そして以下のような感想文を寄せた。

・ぼくはブラジル人だ。「ブラジル風タンゴ」の曲を聞いて、とてもうれしかったです。ブラジルにいたとき、タンゴを聞いていました。ぼくは、ブラジル・日本りょうほう好きです。日本語を早く覚えたいです。今年はブラジルにオリンピックが有る。今日は本当にありがとうございました（小３男子）

この男子児童は演奏が終わった途端に、「ぼくの国の音楽だよ！タンゴだよ！すごいでしょ！」と周囲の児童にアピールした。そして周りの児童も「すごくいい曲だね！」と答え、子供達に笑顔があふれる様子が見られた。その後、筆者の演奏会をきっかけにブラジルの音楽文化や食文化への興味と探究心が起こったという報告を受けている。

その他の演奏会でも、ブラジルの音楽として《オデオン》は子供たちに強い印象を与えた。以下にその感想文の一例を掲載する。

・私はりえ先生がひいてくれた『ブラジル風タンゴ』が心にのこっています。すごく元気で楽しそうなふんいきが頭にうかんできました。（小３女子）
・今日聴いていて心にのこったのが、ブラジルのナザレ―が作曲したオデオンでした。（中１男子）
・今日は平井りえ先生のピアノ演奏、歌声を聴くことが出来て、感動しました。外国のクラシック音楽では音楽から物語を感じることが出来て、自分の周りを美しい世界が囲んだように感じました。ナザレ―の「オデオン」は、今日聴いた、たくさんの音楽の中でも特に印象に残りました、ブラジルはサンバなどのにぎやかな音楽のイメージが強かったのですが、今日聴いた「オデオン」はとても上品に感じました。又、ブラジルの元気で明るい雰囲気も感じられました。（中２女子）

4.8　日本の音楽

日本では第18回大会が 1964年に 東京で開催され、冬季は1972年に第11回大会が札幌で、第18回大会が1998年に長野で開催されている。2020年の東京開催に向けて、日本の歌曲なども積極的に親しむことが必要である。

2016年9月に開催した新潟県村上市立神納中学校、同市立平林中学校での公演では、郷土の風景をテーマにした歌曲を取り上げることにした。前述の2校は村上市の神林地区の中学校であり、この学区内の海辺から眺めた風景を詩にした名曲が存在する。北原白秋の「砂山」である。2015年に筆者が同地区の小学校5校（砂山小学校、平林小学校、神納小学校、西神納小学校、神納東小学校）を訪問した際に、地域住民の方々は中山晋平作曲《砂山》を愛唱しているが、子供達は全く知らないという事実が明らかになった。そこで、オリンピック・パラリンピック教育の一環として、郷土の大切な歌として《砂山》を取り上げた。

「海は荒海、向こうは佐渡よ」という一節から始まるこの歌の詩を読み上げ、風景の確認をした。自分たちが居住している地域から見た情景ということを理解した上で筆者が模範として歌唱した。しみじみと《砂山》を鑑賞したのち、全校でぜひ歌いたいという声が挙がり、その場で練習を行った。

中学生の感想を以下に抜粋し記述する。

・ブラジルやスペイン、イタリアなどの歌もとても良かったし、世界の曲だけではなく、日本の曲中山晋平さんやDr.りえ先生のおじいさんの平井康三郎さんの作品もとてもいい曲だと思いました。中山晋平さんの作曲した「砂山」はDr.りえ先生と一緒に歌ったのでとても心にのこりました。（中1男子）
・「砂山」を歌ったとき、自分の街が歌になるというのはとてもすばらしいことだと思いました。Dr.りえ先生が言っていたように、僕も自分の良いところをたくさん思い浮かべられるような人になりたいと思いました。（中2男子）
・今日の演奏を聴いて、私は初めて『砂山』という曲を知りました。自分の住んでいる村上の歌があることが知れてよかったし、歌詞も村上らしさが伝わってきてとても良かったです。（中3女子）

上記のように、自分たちの郷土と密接な関係を持つ楽曲を知り、歌唱することで、郷土に対する愛着が生まれている。また世界地図を見ながら中学生は様々な国の音楽と比較して、日本歌曲の良さを知り、自分たちが誇れる歌として《砂山》を大切に歌っていくという意識が芽生えた。

このように郷土の情景などをあらわす歌などの存在も、諸外国の音楽と比較することで新たな魅力を発見することができるため、その他の地域でも、郷土と関連のある楽曲を取り上げ、親しみを持つことが大切である。

写真７　《砂山》の歌唱風景
新潟県村上市立平林中学校（2016年９月12日）

写真８　歌唱風景
栃木県栃木市立大宮北小学校低学年対象（2016年６月22日）

オリンピック・パラリンピック教育として世界の音楽を世界地図を見ながら鑑賞することで、それぞれの良さを探し出し、日本の音楽についても比較することで、自国の文化の素晴らしさを再認識することができている。以下に感想文の抜粋を掲載する。

- 今回は過去のオリンピック開催都市を中心としたいろいろな曲を説明つきで聴かせていただいてとても楽しいコンサートでした。特にドビュッシーやグラナドスは名前は聞いたことあるけど曲は聞いたことがなかったので、今回目の前で演奏してもらえて、本当に感動しました。私は、いつもかたよったジャンルの音楽しか聴かないのですが、今回のように知らない作者や曲名でも、まだまだ素晴らしい曲はたくさんある知り、これからはいろいろな分野の音楽を聴いて視野を広げようと思います、（中２女子）
- 今回演奏してもらった曲はたくさんあったのに、その1つ1つの意味や作曲者さんがどんな人だったのかくわしく教えてもらって嬉しかったです。（中３女子）
- 今日の演奏を聴いて思ったことは、音楽にも「和」と「洋」が存在するということです。食事にも和食、洋食がありますが今日聴いた演奏にも「和」と「洋」があるように感じられました。海外の曲は楽しげなテンポの曲もありましたが、全体的に「美しい」感じの曲でした。日本の曲は美しさもありましたがどちらかというと「豊かさ」が感じられる曲がほどんどでした。そして私が海外の音楽で面白いと思ったことは、その曲に込められた物語です。日本の曲一つ一つにも物語や意味が込められていますが、私は海外の曲をあまり聞いたことがなかったので、今日聴いた曲に込められている意味には驚きました。そういった物語や意味を知った後で実際に曲を聴いてみると音程一つ一つがきちんと物語として構成されていて、いつもは聴き流してしてしまっている洋楽も楽しんで聴くことができました。（中３女子）

5. むすび

本研究により、オリンピック・パラリンピック教育のための音楽鑑賞を考察した結果、教科ごとに習得した知識と知識を、音楽が繋ぎ合わせ、新たな知識として理解を深めることができることが明らかになった。特に世界地図を音楽鑑賞に用いることは、単語として記憶した国の名称から、作曲家が活躍し素晴らしい楽曲が生まれた国という印象が残ることで、より国際理解が深まることが明らかになった。そして必要な教具を用い、適切な解説や問いかけを行うことによって、国際理解が深まり、これをきっかけとして、さらなる知識の習得への欲求が芽生えることが子供たちの感想文に表れている。新潟県村上市立神納中学校での公演は新潟県村上市の「あさひちゃんねる」で放映され、同校校長　篭島洋先生からは「体育館いっぱいに響く歌声とピアノに、生徒・教職員・保護者とも深く魅了された2時間でした。コンサート終了後の生徒の感想文にも、クラシック音楽に興味・関心をもちました。音楽家の出身地や作品について調べたくなりましたといった内容が多数ありました」との内容のお手紙をいただいた。音楽鑑賞に世界地図を用いることは、どの学校も実施しておらず、中学校では社会科担当の先生が音楽と社会科の融合について、「まさか音楽で社会科の分野が登場するとは！」と先生ご自身が興味をもって質問して下さった。

2020年のオリンピック・パラリンピック開催国として、スポーツの祭典を文化面からも盛り上げる教育内容として、音楽分野では、音楽鑑賞を通した国際理解の促進がもっとも効果的である。海外の国々について知るだけでなく、自国の文化や郷土の歌などにも積極的に親しみその良さを理解することが重要である。そして世界地図を見ながら、様々な国々の音楽を比較し、それぞれの歴史や地理、文化の違いなど、すべての情報を連動させて、教科を超えた学習ができるような工夫をすることこそ、オリンピック・パラリンピック教育にふさわしい音楽的な取組みである。

今回の研究では、これまでのオリンピック・パラリンピック開催国の音楽を主に取り上げた。

今後は開催国のみならず参加国にも範囲を広げ、音楽からの国際理解について更なる研究を進めたい。

文化庁「文化芸術による子供の育成事業・芸術家の派遣事業
「Dr.りえのおしゃれなクラシックーオリンピック・パラリンピック教育特別プログラムー」
実施校一覧

2015年６月25日 東京都北区立堀船小学校低学年・堀船幼稚園
2015年７月９日 東京都北区立堀船小学校高学年
2016年６月11日 東京都中野区立啓明小学校
2016年６月２日 神奈川県川崎市立金程小学校　低学年
2016年６月３日 神奈川県川崎市立柿生小学校　低学年
2016年６月16日 神奈川県川崎市立金程小学校　高学年
2016年６月17日 神奈川県川崎市立柿生小学校　高学年
2016年６月21日 栃木県栃木市立大宮北小学校　高学年
2016年６月22日 栃木県栃木市立大宮北小学校　中学年
2016年６月23日 栃木県栃木市立大宮北小学校　低学年
2016年９月12日 新潟県村上市立平林中学校
2016年９月13日 新潟県村上市立神納中学校

演奏会に関するテレビ放映　2016年9月22日～9月29日　あさひちゃんねる（新潟県村上市）

参考文献

公益財団法人　日本オリンピック委員会（JOC）
　2016　オリンピック憲章（翻訳・編集　JOC 国際専門部会　部会員　竹内　浩）
東京都北区立堀船小学校
　2016　平成27年度東京都教育委員会「オリンピック・パラリンピック教育推進校」活動報告集

平成28年９月30日受理